

## 臨床実地問題 50 問(解答時間 2 時間)

- 1 病理組織像を別図 1 に示す。  
腫瘍が原発する眼および眼付属組織はどれか。3 つ選べ。  
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 2 別図 2 のような黄斑部所見を示さないのはどれか。  
a Fabry 病 b Gaucher 病 c Tay-Sachs 病  
d Niemann-Pick 病 e 網膜中心動脈閉塞症
- 3 Hess 赤緑試験の結果を別図 3 に示す。  
右眼の外転神経麻痺の症例で正しいのはどれか。  
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 4 眼球組織の電子顕微鏡写真を別図 4 に示す。  
この組織の機能はどれか。  
a 調節 b 導涙 c 房水産生 d 房水流出 e 角膜透明性
- 5 前房容量と年齢の関連について、患者診療録を調べて論文発表予定である。結果を別図 5 に示す。  
正しいのはどれか。2 つ選べ。  
a 介入研究である。  
b 倫理委員会に申請が必要である。  
c 前房容量と年齢の関連をみた散布図である。  
d 前房容量と年齢の関連をみるために t 検定を行う。  
e 70 歳以上の前房容量の平均値は中央値よりも高い。
- 6 眼科器具を別図 6 に示す。  
アイバンクの眼球摘出で用いられるのはどれか。3 つ選べ。  
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 7 83 歳の女性。1 年前から左上眼瞼の腫脹が出現し、徐々に増大したため来院した。眼窩 MRI 画像と摘出した腫瘍の病理組織像を別図 7A, 7B に示す。  
診断はどれか。  
a 血管腫 b 脂腺癌 c 基底細胞癌 d 悪性リンパ腫 e サルコイドーシス
- 8 72 歳の女性。右眼の眼脂が持続し、抗菌薬の点眼で改善しないため来院した。右眼前眼部写真を別図 8 に示す。  
適切な対応はどれか。2 つ選べ。  
a 涙道内視鏡 b 涙小管の圧迫 c 上眼瞼の生検 d 涙点プラグ挿入 e 涙嚢鼻腔吻合術
- 9 37 歳の男性。治療前と切除による治療後の前眼部写真を別図 9 に示す。  
予後に関する説明で正しいのはどれか。  
a 再発することはない。 b 再発したときは再度、切除術を行う。  
c 再発したときは局所化学療法を行う。 d 再発したときは放射線治療を行う。  
e 再発したときは眼窩内容除去術を行う。

- 10 10歳の女児。充血と痒みを訴えて来院した。前眼部写真を別図10に示す。  
有効な点眼薬はどれか。2つ選べ。  
a レバミピド                      b シクロスポリン      c タクロリムス水和物  
d ヒアルロン酸ナトリウム      e ジクロフェナクナトリウム
- 11 48歳の女性。疾患の進展過程を別図11A, 11B, 11C, 11Dに示す。  
考えられるのはどれか。  
a 春季カタル                      b 巨大乳頭結膜炎      c アトピー性角結膜炎  
d 通年性アレルギー性結膜炎    e 季節性アレルギー性結膜炎
- 12 41歳の男性。右眼が徐々に見えにくくなってきたため来院した。視力は右0.03(0.1×-9.00 D ⊂ cyl-8.00 D Ax 110°)。右眼細隙灯顕微鏡写真と角膜形状解析の結果を別図12A, 12Bに示す。  
診断はどれか。  
a 円錐角膜                      b LASIK術後      c Mooren角膜潰瘍  
d Terrien辺縁角膜変性      e ベルーシド辺縁角膜変性
- 13 24歳の女性。父親と妹に結膜炎が出現し、その1週後に本人に発症した。発症の5日後から霧視を自覚した。左眼前眼部写真を別図13A, 13Bに示す。  
この疾患で正しいのはどれか。2つ選べ。  
a ウイルス感染の合併症である。      b アシクロビル眼軟膏が著効する。  
c 乳幼児では偽膜を形成しやすい。      d 結膜上皮細胞に封入体がみられる。  
e 副腎皮質ステロイドは無効である。
- 14 68歳の女性。近医で長期にわたり角膜びらんの点眼治療を受けていたが、1週前から左眼の視力が低下したため来院した。現在の治療はモキシフロキサシン塩酸塩点眼とブロムフェナクナトリウム点眼およびヒアルロン酸ナトリウム点眼である。前眼部フルオレセイン染色写真を別図14に示す。  
適切な対処法はどれか。2つ選べ。  
a 現在の点眼中止                  b 人工涙液点眼      c 0.1%ベタメタゾンリン酸エステルナトリウム点眼  
d アシクロビル眼軟膏              e 涙点プラグ挿入
- 15 別図15に示す症例のうち、緊急処置・加療を要するのはどれか。2つ選べ。  
a ㉠      b ㉡      c ㉢      d ㉣      e ㉤
- 16 65歳の女性。右眼の視力低下を主訴に来院した。視力は右0.03(0.1×-6.00 D ⊂ cyl-0.50 D Ax 120°)、左0.05(0.6×-7.00 D ⊂ cyl-0.50 D Ax 110°)。右眼細隙灯顕微鏡写真と波面収差測定(角膜、眼球)の結果を別図16A, 16B, 16Cに示す。  
正しいのはどれか。3つ選べ。  
a 核白内障                      b 後囊下白内障      c 単眼複視の症状  
d 角膜の高次収差増加              e 水晶体の高次収差増加
- 17 40歳の男性。2か月前から右眼歪視を訴えて来院した。視力は右0.2(0.9×-6.50 D)。OCT像を別図17に示す。  
診断名はどれか。  
a dome-shaped macula              b 後部強膜炎      c 網膜色素線条  
d ポリープ状脈絡膜血管症      e 中心性漿液性脈絡網膜症

- 18 72歳の男性. 1か月前から嘔声が気になっていた. 2週間前から右眼が見えにくいのを自覚したため来院した. 矯正視力は右1.0, 左1.2. 受診時の眼底自発蛍光写真とOCT像および視野検査の結果を別図18A, 18B, 18Cに示す. 行うべき検査はどれか. 2つ選べ.
- a ERG    b 胸部CT    c 頭部CT    d 髄液検査    e フルオレセイン蛍光眼底造影
- 19 6歳の男児. 小学校の検診で視力不良を指摘されて来院した. 視力は右0.5(0.7×-0.75 D ⊂ cyl-0.75 D Ax 130°), 左0.6(0.8×-0.25 D ⊂ cyl-1.50 D Ax 50°). 両眼の眼底写真とOCT像を別図19A, 19Bに示す. 誤っているのはどれか.
- a 性染色体劣性遺伝である.    b 黄斑に車軸状の皺襞をみる.    c 視力予後は極めて不良である.  
d 原因遺伝子はRS1遺伝子である.    e 約半数で網膜周辺部病変を合併する.
- 20 眼底写真を別図20Aに示す.  
この眼底のOCT像は別図20Bのどれか.
- a ①    b ②    c ③    d ④    e ⑤
- 21 1歳の女児. 左眼の充血に家族が気づき来院した. 左眼は網膜全剥離である. 右眼眼底写真を別図21に示す. 診断に有用なのはどれか.
- a ERG    b OCT    c 前房穿刺    d 染色体検査    e 超音波Bモード検査
- 22 2歳の男児. 眼振と視力不良のために来院した. 身体所見に異常は認めない. 右眼眼底写真と黄斑部OCT像を別図22A, 22Bに示す. 母親の眼底には周辺部の色素脱失を認める. 診断はどれか.
- a Best病    b 眼白皮症    c Stargardt病    d 猫ひっかき病    e 先天停在性夜盲
- 23 31歳の男性. 2週前に嘔吐した後から右眼の飛蚊症を自覚して来院した. 初診時と4か月後の眼底写真およびOCT像を別図23A, 23B, 23C, 23Dに示す.  
診断はどれか.
- a Terson症候群    b 後部硝子体剥離    c Valsalva網膜症  
d Purtscher網膜症    e 網膜細動脈瘤破裂
- 24 42歳の男性. 2週間前から右眼がかすみ, 徐々に増悪するため来院した. 健康状態に問題はなく, 海外渡航歴もない. 右眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真を別図24A, 24Bに示す.  
原因として考えられる微生物はどれか.
- a ウイルス    b 寄生虫    c 原虫    d 細菌    e 真菌
- 25 70歳の女性. 1か月前から右眼の飛蚊症を自覚して来院した. 視力は両眼ともに1.2(矯正不能). 眼圧は右10 mmHg, 左13 mmHg. 初診時の右眼眼底写真を別図25Aに示す. 副腎皮質ステロイド点眼を処方し, 経過観察をしていたが, 2か月後に別図25Bのような眼底所見となった.  
診断に必要な検査はどれか.
- a 胸部X線撮影    b 梅毒血清学的検査    c 血清抗トキソプラズマ抗体測定  
d 眼内液中のIL-10とIL-6測定    e 血清アンギオテンシン変換酵素測定
- 26 36歳の女性. 10日前から右眼の飛蚊症を自覚して来院した. 視力は右0.8(1.2×-0.75 D), 左0.8(矯正不能). 眼圧は右12 mmHg, 左13 mmHg. 右眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真を別図26A, 26Bに示す.  
診断に有用な血液検査はどれか.
- a β-D-グルカン    b 抗HTLV-1抗体    c 尿中β<sub>2</sub>-ミクログロブリン  
d 抗好中球細胞質抗体(ANCA)    e インターフェロンγ遊離試験

- 27 30歳の女性。2週前から右眼が見えにくくなり来院した。矯正視力は右1.2。右眼眼底写真とOCT像およびフルオレセイン蛍光眼底造影写真を別図27A, 27B, 27Cに示す。  
診断に有用な検査はどれか。  
a FDG-PET    b 眼窩CT    c 頭部造影MRI    d  $^{123}\text{I}$ -IMP SPECT    e  $^{67}\text{Ga}$ シンチグラフィ
- 28 38歳の男性。健康診断で高血圧を指摘され、内科から眼底検査を勧められて受診した。両眼の眼底写真を別図28に示す。  
Scheie分類のどれに当てはまるか。  
a H0S0    b H1S1    c H2S2    d H3S3    e H4S4
- 29 10歳の女児。幼児期から右眼の動きがおかしいと訴えて来院した。視力は右1.0(矯正不能)、左1.2(矯正不能)。複視の訴えはない。9方向眼位写真と輻湊眼位写真を別図29A, 29Bに示す。  
診断はどれか。  
a Duane 症候群    b Fisher 症候群    c Foville 症候群  
d Möbius 症候群    e Millard-Gubler 症候群
- 30 5歳の女児。眼位写真を別図30に示す。  
治療法はどれか。  
a プリズム眼鏡    b 上斜筋移動術    c 下斜筋後転術  
d 下直筋鼻側移動術    e A型ボツリヌス注射
- 31 8歳の男児。先天眼振があり別図31Aのような代償頭位がみられる。プリズム眼鏡を装着させると別図31Bのように頭位が改善した。  
正しいのはどれか。  
a 眼振は周期性である。  
b 両眼視機能は不良である。  
c 内直筋と外直筋は等量手術する。  
d 手術は右内直筋後転と左外直筋後転を行う。  
e プリズムは右眼に基底内方、左眼に基底外方である。
- 32 32歳の男性。生来視力は良好である。数日前から右眼の霧視を自覚したため来院した。視力は右0.9(1.2×+1.50 D)。右眼眼底写真とOCT像および眼底自発蛍光写真を別図32A, 32B, 32Cに示す。  
考えられるのはどれか。  
a 白血病    b 視神経炎    c 虚血性視神経症    d 乳頭ドレーゼン    e サルコイドーシス
- 33 62歳の女性。健康診断で左眼の異常を指摘されて来院した。視力は右0.3(1.2×-1.75 D)、左0.5(1.2×-1.50 D)。眼圧は右11 mmHg、左12 mmHg。左眼眼底写真を別図33に示す。  
考えられるのはどれか。  
a 他臓器に転移する。    b 右眼にも発症する。    c 視野障害がみられる。  
d 急激な視力低下を生じる。    e 過去1年以内に発症した。
- 34 53歳の女性。2か月前から左眼の充血に気付いていたが放置していた。2週前から物が二重に見え、徐々に増強するのに気付き来院した。視力は右1.0(1.2×+0.50 D)、左0.9(1.2×-0.75 D)。初診時の左眼前眼部写真と頭部MRI画像を別図34A, 34Bに示す。  
この患者にみられる複視の原因で最も頻度の高いのはどれか。  
a 上直筋腫脹    b 内直筋腫脹    c 動眼神経麻痺    d 滑車神経麻痺    e 外転神経麻痺

- 35 83歳の男性。半年前に転倒し顔面を強打した。その後からピントが合いづらく、最近では物が上下にずれて見えるようになったため来院した。眼圧は正常。前眼部と中間透光体および眼底では中等度の白内障を認める。日内変動はない。両眼の眼底写真と Hess 赤緑試験の結果を別図 35A, 35B に示す。  
この患者にみられるのはどれか。
- a 顔面の非対称      b 左への顔まわし      c 左顔面神経麻痺  
d 顎上げの頭位異常      e 頭部傾斜試験陽性
- 36 25歳の女性。眼圧は右 35 mmHg, 左 15 mmHg。左眼前眼部に異常は認めない。右眼前眼部写真を別図 36A に示す。  
患眼のスペキュラマイクロスコープ写真は別図 36B のどれか。
- a ㉠      b ㉡      c ㉢      d ㉣      e ㉤
- 37 64歳の男性。原発開放隅角緑内障で経過観察中である。右眼 OCT による黄斑部解析結果を別図 37A に示す。  
中心 10° 内視野測定結果は別図 37B のどれか。
- a ㉠      b ㉡      c ㉢      d ㉣      e ㉤
- 38 43歳の男性。内科から糖尿病の眼底検査を依頼されて受診した。視力は右 0.7(1.2×+1.50 D), 左 0.5(1.2×+2.50 D)。眼圧は両眼ともに 15 mmHg。1時間の暗室でのうつぶせ後の眼圧は右 21 mmHg, 左 26 mmHg。超音波生体顕微鏡 (UBM) 像を別図 38 に示す。  
正しいのはどれか。2つ選べ。
- a 水晶体脱臼が疑われる。      b 毛様体は観察されない。      c Zinn 小帯が観察される。  
d 虹彩の前方湾曲が認められる。      e Double hump sign が認められる。
- 39 高齢者の高眼圧を伴う緑内障症例の隅角写真を別図 39 に示す。  
白内障手術併用眼内ドレーンの適応はどれか。2つ選べ。
- a ㉠      b ㉡      c ㉢      d ㉣      e ㉤
- 40 63歳の女性。健診で緑内障の疑いを指摘されて来院した。矯正視力は両眼ともに 1.2。眼圧は右 22 mmHg, 左 23 mmHg。両眼の視神経乳頭所見と視野所見を別図 40A, 40B, 40C に示す。  
まず行うべき検査はどれか。
- a OCT 検査      b 角膜厚測定      c 頭部 MRI 検査  
d うつ伏せ誘発試験      e Goldmann 動的視野検査
- 41 48歳の男性。交通事故で救急搬送された。視力は右眼前手動弁(矯正不能)。眼圧は右 3 mmHg。超音波 B モード検査では網膜剥離はみられない。右眼前眼部写真を別図 41 に示す。  
初期対応で正しいのはどれか。
- a 安静      b 強膜裂創の確認      c 前房洗浄      d 白内障手術      e 硝子体手術
- 42 56歳の男性。昨日から右眼の暗点、霧視を自覚したため来院した。視力は右 0.9(矯正不能)。初診時の眼底写真と OCT 像を別図 42A, 42B に示す。  
適切な対応はどれか。
- a 経過観察      b 汎網膜光凝固      c 抗血小板薬内服  
d 抗 VEGF 薬硝子体内注射      e 副腎皮質ステロイド後部テノン嚢下注射
- 43 3歳の女児。他院で白内障と診断され、精査目的で来院した。初診時の視力は調節麻痺下で右 0.4(0.4×+0.25D), 左 0.2(0.2×+0.25 D)。眼圧は両眼ともに 10 mmHg。眼底に異常はない。細隙灯顕微鏡写真を別図 43 に示す。  
適切な対応はどれか。
- a 経過観察      b 眼鏡処方      c コンタクトレンズ処方      d 散瞳薬点眼      e 早急な白内障手術

- 44 75歳の男性. 右眼の白内障手術を希望して来院した. 視力は右0.09(0.5×-2.00 D ⊂ cyl-4.00 D Ax 95°). 術前のケラトメータ値を別図44に示す.  
術後乱視が最も少ない眼内レンズはどれか.
- 単焦点眼内レンズ
  - 2.50 D 矯正可能なトーリック眼内レンズを5度に挿入
  - 2.50 D 矯正可能なトーリック眼内レンズを95度に挿入
  - 4.00 D 矯正可能なトーリック眼内レンズを5度に挿入
  - 4.00 D 矯正可能なトーリック眼内レンズを95度に挿入
- 45 79歳の女性. 1か月前からの右眼の視力低下を主訴に来院した. 視力は右0.6(矯正不能). 5年前に白内障手術の既往がある. 前眼部写真を別図45Aに示す.  
治療に使用するレンズは別図45Bのどれか.
- Ⓐ
  - Ⓑ
  - Ⓒ
  - Ⓓ
  - Ⓔ
- 46 66歳の女性. 右眼特発性黄斑円孔に対して硝子体手術とSF<sub>6</sub>ガスタンポナーデを行った. 術後1週目でガスがまだ30%程度残っているが, 2日前からうつむき姿勢は解除している. 治療前と術後1週のOCT像を別図46A, 46Bに示す.  
適切な対応はどれか.
- 経過観察
  - うつむき姿勢の継続
  - トリアムシロンアセトニド後部テノン嚢下注射
  - ガスの再注入
  - 再手術
- 47 52歳の男性. 1か月前から右眼の飛蚊症を自覚し, 3日前から突然の視力低下を自覚して来院した. 視力は右0.06(矯正不能). 眼圧は右10 mmHg. 右眼眼底写真を別図47に示す.  
この患者の硝子体手術に特有の合併症はどれか.
- 網膜出血
  - 脈絡膜剝離
  - 医原性網膜裂孔
  - 液体パーフルオロカーボン網膜下迷入
  - トリアムシロンアセトニド網膜下迷入
- 48 術中写真を別図48に示す.  
何の操作をしていると考えられるか.
- 液ガス置換
  - 黄斑前膜の剝離
  - 後部硝子体剝離の作成
  - 真菌性眼内炎に対する硝子体切除
  - 液体パーフルオロカーボンとシリコーンオイルの直接置換
- 49 33歳の男性. 6か月前から左眼の視力低下を自覚して来院した. 視力は左0.4(矯正不能). 眼圧は左14 mmHg. 左眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真およびOCT像を別図49A, 49B, 49Cに示す.  
適切な対応はどれか.
- 経過観察
  - 硝子体内ガス注入
  - 抗VEGF薬硝子体内注射
  - 強膜内陥術
  - 硝子体手術
- 50 72歳の女性. 2か月前から視力が低下し, 視力は右0.1(0.2×-1.00 D). 経過観察しても視力が改善しないため, レーザー光凝固を行うことになった. 右眼眼底写真とOCT像を別図50A, 50Bに示す.  
術後に起こり得る合併症はどれか. 2つ選べ.
- 網膜出血
  - 網膜静脈分枝閉塞
  - 網膜動脈分枝閉塞
  - 網膜色素上皮裂孔
  - 裂孔原性網膜剝離